

**進捗状況の概要** 【1ページ以内】

本事業は基本的には (1) 第一期キャンパスアジアプログラムを継続しつつ、(2) その高度化をはかり、正規プログラムとして定着させること。また、(3) サマースクールのオープン化をはかることである。さらに、(4) 博士課程でのダブルディグリープログラムの構築を目指している。以下それぞれについて進捗状況の概要を記す。

**1. これまでに構築してきたダブルディグリー (DD) プログラムの継続**

本プログラムによるDD生は3大学共に正規の修士修了生として認定されており、各大学共に、学内制度・カリキュラムについては、修正を必要としないことで一致している。これまで通り、DD生を、正規入学生として選考の上、入学許可を与え、半期の留学、2回のサマースクールによりカリキュラムに従った教育を受けさせた上で、単位の認定、移管・互換を行い、必要な単位を取得できた学生については、修士論文の提出と研究発表を行わせ、共通の審査に合格した者にDD取得を認めている。DD取得の認定については、3大学の学長がそろって署名したDD取得認定書を授けており、ジョイントディグリー(JD)に匹敵する新たなDDプログラムの完成を見ており、今後も継続していく。

**2. DDプログラムの高度化と定着のための検討**

第Ⅱ期キャンパスアジア (CA) プログラムが終了し、財政支援が得られなくなった後も、このDDプログラムを継続・定着させるための検討を開始した。その結果、財政問題を除けば、教育内容・カリキュラム共に、大きな変更の必要はないということで一致した。問題は、財政支援にあることは各大学共通の課題であるとの認識のもと、各大学内で支援を得る方法の検討、外部資金獲得の方法等の検討を開始した。

当初プログラムに参加したのは、九大は総合理工学府全体であったが、釜山国立大学校、上海交通大学とも機械工学専攻と、環境工学専攻の2専攻のみであった。事業の成功を見て両大学とも、参加する専攻を増やし、共に工学研究科全体が参加することとなり、第2期CAプログラムを実施するための交流協定も、それに添ったものに改定できた。これにより、CAプログラムの枠組みがはずれても、3大学間で継続・定着する意志が確認できた上、そのための準備が公式にできることとなった。これに従い、九大総合理工学府では、CAプログラムを実行するための組織の見直しに取り組み、専任教員の雇用をやめ、学内支援教員が、これに当たることとして組織の改編をおこなった。

**3. サマースクール(SS)のオープン化**

SSは3大学協働事業であり、輪番で主担校となり、大学の夏期休業時の8月に約2週間にわたって交換留学生を一堂に集め、開催している。これには、CAプログラムの重要な目的であるグローバル人材の育成として、DD生のみならず、より広い範囲の大学院生を参加させ英語での教育や研究の機会を与えた。このため参加を希望する学生は多く、日中韓3ヶ国以外の学生からの問い合わせも少なくない。このプログラムの枠組外の学生の場合は、費用を自ら負担できる場合に限って、あるいは他のプログラムと協働教育作業として、参加を認めており、サマースクール出席者約90-100名の内1割程度は、プログラム枠組み外の学生である。このように、SSのオープン化を進めており、それに成功したと言える。

**4. 博士課程でのダブルディグリー (DD) またはジョイントディグリー (JD) プログラムの構築**

博士課程でのDD/JDを1年間の留学と、可能ならば母大学の通常の修了期間内(長くても1年以下の留学)での修学により取得できるプログラムの構築を目指して議論を開始した。このため、博士課程の学生の短期交流を開始した。これにより博士課程の学生が、派遣先大学で研究に取り組むための支援体制の構築及び環境整備をはかっている。その結果、学習すべき授業内容と必須単位数、博士学位取得に必要な条件、博士論文の審査方法、博士論文以外の条件など、3大学でかなり異なっていることが判明し、その刷りあわせを行った。数回にわたる国際PDCA委員会での議論の末、単位互換・移管の利用、1年間の留学により、必要単位をそろえられる見通しが得られた。現在、博士論文の内容、審査等について調整中であり、DDかJDかの選択も含め、パイロットプログラムとして平成30年度中には発足することを目指して協議を続けている。

**【本事業における中間評価までの交流学生数の計画と実績】**

平成28年度				平成29年度			
派遣		受入		派遣		受入	
計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績
75人	102人	12人	50人	58人	48人	74人	120人

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

**特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】****1) 3大学の学長が共同署名した修了書を発行**

協働教育のあり方として、ジョイントディグリープログラムが推奨されているようではあるが、教育基本法との縛りもあり、実現は容易ではない。本プログラムで完成させることができたのは、まさに実質的なジョイントディグリープログラムである。修了生は、母大学及び留学先大との両方で、それぞれ正規の修了書と学位を得るだけでなく、3大学の学長が共同署名した、ダブルディグリーを取得したことの認定書が付与される。これは就職先での評価を格段に高めており、本プログラムにより、ダブルディグリーの新たなかつ理想的なプログラムを完成させた。

**2) 98名のダブルディグリー生を輩出**

前期のプログラムから引き継いで合算すると、3大学合わせて98名のダブルディグリー生を輩出した。これは、画期的な事と言える。外国の大学との間で修士課程でのダブルディグリーを取得できるプログラムはいくつかあるが、いずれも、これまでに数名がダブルディグリーを取得しているに過ぎない。本プログラムにより九大生だけでも36名が、ダブルディグリーを取得できている。

**3) 工学教育賞（文部科学大臣賞）の受賞**

平成27年第63回日本工学教育年次大会において、プログラムコーディネーターの田邊哲朗特任教授が本プログラムの概要について紹介を行ったところ、その事業実績が高く評価され、国際セッション発表賞（International Session Award）を受賞した。さらに、特に優れた業績と認められたため、平成28年第64回日本工学教育年次大会において文部科学大臣賞の栄誉を受けた。

**4) プログラムに参加する専攻の増加**

当初プログラムに参加したのは、九大は総合理工学府全体、釜山国立大学校は大学院工学研究科の機械工学専攻と、環境工学専攻の2専攻、上海交通大学は、大学院機械工学専攻と環境工学専攻の2専攻であったが、釜山国立大学校、上海交通大学とともに、参加する専攻を増やし、両者ともに工学研究科全体が参加するようになり、第2期キャンパスアジアプログラムを実施するための交流協定も、それに添ったものに改定することができた。これにより、キャンパスアジアプログラムの枠組みがはずれても、3大学間で継続・定着する意志が確認できた。

**5) サマースクールプログラムの成功**

本来、ダブルディグリー生に、自らの専門に加えて、エネルギー環境問題に取り組むためのプログラムとして開発したものであり、外部からの評価も高いプログラムである。これをダブルディグリー生以外にも開放し、のべ1,000名（毎年約100名）にも及ぶ日中韓の学生が、2週間にわたって寝食を共にし、英語のみで交わり、共に学ぶ。さらに、小人数のグループに分かれて行われる実験室演習での濃密な交わりは、我々の予想を超えた国際交流に進展し、生涯の友を得たと喜びを露わにする学生も少なくない。エネルギー環境問題は共通の課題であるだけに、打ち解けるのも早く、主催者としてはプログラムの成功を確信できる一事になっている。

**6) スタッフ人材の充実**

学生のケアは行き届いている。英語はもとより、中国語、韓国語を母国語とする担当教員を配備できただけでなく、上海交通大学には日本語を話せる教員が、釜山国立大学校には日本語が堪能な専門職員が配備されており、これまで、学生達が困るようなことは、全くと言って良いほど出現していない。

また、九大の専門職員は英語に堪能で、かつ、非常に親切に対応してくれている。具体的には、学務関連（留学中の単位取得の管理など）、来日時のオリエンテーションをはじめとした生活全般、留学中の困ったことの相談と解決、日本人学生との交流機会の設定、帰国後の卒業までのフォローにより、無事DDを取得して卒業できるようバックアップしている。さらに、卒業後も日本で就職や進学を希望する学生について、各種証明書の発行や送付、日本の企業や大学とのやり取り等、できる範囲で協力している。